

## 編集後記

水温む三月、魚は動きだしただろうか、雪はどのくらい残っているだろうか、そぞろに心誘われる季節です。季節の推移など忘れさせる多忙さのなかに、国立大学法人化の初年度を過ごし、この度ようやく『メディアと文化』の創刊に漕ぎ着けることができました。執筆者の皆様のご協力に感謝します。平成15年度に産学連携のメディアプロフェッショナル論講座がスタートして以来、待望されていたメディア研究の発表の場が誕生しました。

たちどころに色々な声が聞こえてきそうです。例えば、A氏「最近のメディア・テクノロジーの急速な発展は、グーテンベルグの活版印刷術によって出現した一つの文明を終わらせ、新しい文明を作り出しつつあると言われてるんですよ。ジャーナルの刊行を喜んでるなんてアナクロニズムじゃありませんか」—B氏「イヤイヤ、印刷文明の終焉どころか、電子メディア時代到来にともない文字メディアによって育まれてきた人間性が崩壊すると論じる人もいるくらいです。出版は今後ますます重要になりますよ」—C氏「とにかく現実のメディア産業における革新をご覧ください」—D氏「そうです、僕の作った映画も見て下さい」。今メディアをめぐる論議は盛んになる一方です。メディアと文化に関する多様な声を反映するジャーナルに育つことを願っています。

今後『メディアと文化』は年一回発行とし、基本的に、レフリーによる審査を経た論文を掲載する学術誌としての性格を保つ方針です。同時に、国際言語文化研究科主催のメディア関連シンポジウム等のイベントを報告し、また院生が制作したメディア関連の作品・コンテンツを紹介する場にもしたいと思います。このように『メディアと文化』を、日本の大学には見つけにくい、新しいタイプの研究ジャーナルとして発展させたいというビジョンを持っています。論文・作品などを投稿できる資格者の範囲として、国際言語文化研究科に所属するすべての教員と客員教授、メディア関連授業担当の非常勤講師、メディアプロフェッショナル論講座院生、同講座修了者を考えています。投稿規定の詳細は検討が済み次第発表する予定です。

(2005. 3 KT)